ジャン・フロワサールの『年代記』第三巻「ベアルンの旅」における禁忌の物語

竹田　千穂

ジャン・フロワサールは、十四世紀という時代を代表する年代記作家であるのみならず、時には宮廷詩人、そして物語作家としても作品を残している。歴史著述家としてのフロワサールを論じる際に、しばしば彼の詩作品や、あるいは韻文で書かれた物語を参照する傾向があるのは、彼の『年代記』における記述の中で、単なる歴史著述家の枠におさまらない表現方法が試みられている点が大きいと思われる。フロワサールがその『年代記』を執筆した目的が、生涯のテーマとして定めた騎士たちの武勲を後世に書き残すためであることは、それぞれの巻の序文に記されていることからも明らかである。しかし彼が、歴史的史実を収集した証言に基づいてクロノロジックに物語るというそのスタイルを逸脱し、文学的趣向を凝らしたといえる表現方法をとって何かを語ろうとするとき、そこには、彼が掲げた騎士たちの華々しい武勲を書き残そうという『年代記』執筆の本来の目的から少し離れた別の意図を垣間見せてくれる場合がある。

この論文では、フロワサールの韻文作品に表れる現実描写や自伝的要素を示す側面と、散文で書かれた歴史的著述に現れる文学的手法に注目しながら、『年代記』第三巻の「ベアルンの旅」と呼ばれる、一種の旅行記のような様相を呈する箇所のクライマックスとして、この地でのフロワサールの庇護者となるフォワ伯の子殺しの逸話が語られた後に、引き続いて語られるフォワ伯にとって庶子の兄弟にあたるピエール・ド・ベアルンの夢遊病の逸話を取り上げてみたい。この逸話においてフロワサールは、神話から引用したエピソードを、主題と響き合うように配置して物語っている。なぜフロワサールは神話的要素をこの逸話に加えねばならなかったのか。この神話が、果たしてどのような意図のもとに挿入されたのかを考察してみたい。

1. 年代記作家としての背景―韻文と散文の間で―

フロワサールの現存する『年代記』第一巻が、年代記作家としての彼の先駆者ジャン・ル・ベルの年代記の転写から始まっていることは、彼自身が第一巻の序文で述べている通りである[1]。ジャン・ル・ベルはリエージュの貴族の家系出身であり、フロワサールの郷里エノー伯領ヴァランシエンヌで彼の庇護者一族、ことに当主ギヨーム二世の叔父であったジャン・ド・ボーモンに近しく、1327 年にはともにスコットランドへ出陣した仲であった。彼はこのような貴族たちとの交流と、自らの戦地での体験を通して知り得た事実のみを、「歴史的真実」として語ることにこだわりをみせ、当時の歴史を主題として書かれた韻文作品に対して、韻律に囚われるあまり、その記

[1] Jean Froissart, *Chroniques de J. Froissart*, publiées pour la Société de l'Histoire de France par Siméon Luce, Paris, Renouard, 1869-1975, 15 tomes (jusqu'au troisièm Livre), (=SHF), vol.1-2, valiantes, pp. 209-211.

述に虚偽の要素を混ぜることに不快感を示したが[2]、このジャン・ル・ベルの影響下のもとに、フロワサールは散文でその『年代記』の執筆を始めた。ゆえに「歴史的真実」という、出来事の信憑性に重きを置くフロワサールの姿勢は、彼の先駆者ジャン・ル・ベルに勝るとも劣らず、その『年代記』全巻を通して貫かれているといえよう。にもかかわらず、フロワサールの歴史的記述には、「ベアルンの旅」の逸話におけるような、複数の話者を内容に応じて使い分け、対話体を用いながら逸話を効果的に語り聞かせていくという文学的な手法を駆使したり、神話から引用したエピソードや不可思議な事件についての言及を混在させることで、フィクションと現実の間に、厳格な区切りをつけていないような印象を与える部分がある。

この豊かで多様な表現の要素が歴史的著述に流れ込んでいる背景には、フロワサールが歴史記述以外にも、アーサー王伝説の流れをくむ『メリアドール』（*Meliador*）をはじめとする韻文作品の作者であったということが影響していると思われる。この点を考えるとき、ジャン・ル・ベルへの傾倒にもかかわらず、その記述が明らかな文学的特質を持っている歴史作家フロワサールの最初の作品が実は韻文で書かれていたのではないか、という推測がなされていることは注目に値するだろう。フロワサールが自らその作品の序文で触れている[3]、韻文で書かれ、イングランド王妃フィリパ・ド・エノーに捧げられたという彼の最初の歴史作品は、残念ながら失われてしまった。存在していたという確証もこの序文以外からは得られていない。またフロワサールの『年代記』の記述には、韻文から書き直されたことをうかがわせるような韻律や脚韻などの痕跡がみられないという指摘もある[4]。フロワサールは先駆者ジャン・ル・ベルの意見にしたがって、自分の手で韻文で書かれたこの最初の作品を封印してしまったのではないかとも考えられている[5]。しかし、上記の序文の一節を信じるならば、叙事詩的な歴史作品を、その出来不出来は別として、年代記作家としてのスタートに書き上げたという経験がその後のフロワサールの記述の発展の素地になったという可能性は、十分にあると思われる。

さて、フロワサールが歴史著述家として散文で執筆を開始する際の上記のような背景に加えて、フロワサールの韻文作品にみられる自伝的・回想録的な要素、あるいはルポルタージュ的とも言える性質を考えるとき、フロワサールという著述家にとって、実はこの韻文と散文という表現形式の垣根は意外に低いものであったのではないかという印象を受ける。フロワサールは自らの実体験を基にした記述を散文・韻文両方で書き残しているだけでなく、韻文で培った暗示的な表現手法を、歴史的著述に向けた散文体に取り入れているからである。

ここで「ベアルンの旅」でフロワサールが記述するフォワ伯領オルテズの宮廷での生活を、彼

---

[2] Jean le Bel, *Chronique de Jean le Bel*, publiées par Jules Viard et Eugène Déprez pour la Société de l'Histoire de France, Paris, Renouard, 1904-1905, 2 vol., pp. 1-4.

[3] Jean Froissart, *Chroniques de J. Froissart*, publiées pour la Société de l'Histoire de France par Siméon Luce, vol.1-2, valiantes, p. 210.

[4] Michel Zink, *Froissart et le Temps*, Paris, Presses Universitaires de France, 1998, p. 32.

[5] P. F. Ainssworth, *Jean Froissart and the Fabric of History, Truth, Myth, and Fiction in the Chroniques*, Oxford, Clarendon Press, 1990, p. 45.

が韻文で描写した箇所に注目してみたい。フロワサールは 1388 年の初冬にこの伯の宮廷を訪れた。フォワ伯は、すでに名の知れた歴史記述家であり詩人となっていたフロワサールを歓待し、彼が伯のために持っていった自作の韻文作品『メリアドール』を毎晩フロワサールに朗読させ、宮廷の取り巻きに読み聞かせさせたのであったが、このフォワ伯は、次のような一風変わった生活習慣を持っていた。大好きな狩に出かける時以外は、六時課の後、すなわち午後の三時頃まで起床せず、夕方の五時頃から、自室を出て、回廊へ行き、訪ねて来る者たちにそこで謁見をした。その後広間で簡単に鳥料理の食事を取り、また回廊へ戻ると、取り巻きの者たちとそこを行ったり来たりしながら、おしゃべりをし、夜の八時頃になると彼はワインを持ってこさせ、真夜中まで再び自室に引きこもった。この時間に廷臣たちはようやく自由な時間を迎える。フロワサールは、フォワ伯のもとに寄宿するその他の者たちと町の中の「月」という名の旅館に泊まっていたため、暖炉の前でワインを飲みながら互いに情報を交換しあい噂話に花を咲かせるこの者たちに混じって情報収集に励むことができた。この団欒の後、真夜中近くに城の鐘が鳴らされると、二人の侍臣が掲げる松明に照らされて、毎晩寒風吹きすさぶ中を彼らは城へ戻らなければならない。そして城主の部屋の前で彼が出てくるのをひたすら待つのである。フォワ伯が出てくると、十二人の従僕が十二本の松明で先導するのについて大広間へ行き、そこで、一同の晩餐が始まる。その後伯は回廊に戻り、夜明けまで、取り巻きと話をしたり、フロワサールに前述の『メリアドール』を朗読させてから、ようやく解散となるのである。この時の模様をフロワサールは『フロラン物語』（*Le Dit dou Florin*）[6]の中で次のように詠っている。

Et pour ce que joc moult de painne	さてなぜなら私がたいそう苦労をし
Tamaint jour et mainte sepmainne	何日も何週間もの間
De moi relever a mie nuit	真夜中に起き上がり
Ou temps que les cers vont en bruit	雄鹿が音をたててうろつく時刻に
Sis sepmainnes devant noel	クリスマスの六週間も前から
Et quatre apres de mon ostel	四週間後まで、私の宿から
A mie nuit je me partoie	真夜中に出かけていたのだから
Et droit au chastiel men aloie	そしてまっすぐに城へと行ったのだ
Quel temps quil fesist plueve ou vent	雨が降ろうと風が吹こうと
Aler mi couvenoit. souvent	私は行かねばならなかったのだ。しばしば、
Estoie je vous di moullies	私はあなたに言うが、ずぶ濡れになった
Mes jestoie bel recoeillies	しかし私は歓迎された
Dou conte et me faisoit des ris	伯によって、そして彼は私を笑わせた
Adont estoi je tous garis	それで私はすっかり安らかになり

[6] フロワサールはこの物語詩を、フォワ伯の宮廷に三ヶ月ほど滞在した直後の 1389 年の 5 月に、アヴィニョンで制作した。フロワサールがフォワ伯から授かった下賜金を盗まれてしまったことから、複数の庇護者に対する、まさにお金の無心という実用的な意味あいのこめられた作品である。

Et aussi dentree premiere	そうしてまた、一番乗りをした
En la sale avoit tel lumiere	広間は光に溢れていた
Ou en sa chambre a son souper	彼が夜食をとる部屋も
Que on y veoit ossi cler	そこはとても明るくて
Que nulle clarete poet estre	昼間の光と見まごうばかり
Certes a paradys terrestre	確かに地上の楽園だと
Le comparoie moult souvent	私はそこをたとえたものだった
La estoie si longement	私は長くそこにとどまった
Que li contes aloit couchier	伯がお休みになるまでは
Quant leu avoie un septier	私は読み上げていた
De foeilles et a sa plaisance	七ページを、彼のお気に召すままに
Li contes avoit ordenance	伯はそうするのが常だったのだが
Que le demorant de son vin	ご自分の残ったワインを
Qui venoit dun vaissiel dor fin	純金の水差しからつがれた
En moi sonnant cest chose voire	私を呼ばれて、これは本当のことだが
Le demorant me faisoit boire	残ったワインを飲ませて下さった
Et puis nous donnoit bonne nuit	そうして我々にお休みを言った
En cel estat en ce deduit	このような状況でこのような楽しみの内に
Fui je a ortais .i. lonc tempoire	私はオルテズに長い間留まった
Et quant joc tout parlit listoire	そして私がすっかり物語ってしまうと
Dou chevalier au soleil dor	金の太陽の紋章の騎士について
Que je nomme melyador	私がメリアドールと呼んでいる［物語を］
Je pris congie et li bons contes	私は暇乞いをした、すると良き伯は
Me fist par la chambre des contes	彼の会計課から
Delivrer quatre vins florins	八十フロランを届けさせたのだ
Darragon tous pesans et fins[7]	アラゴン金貨で、どれも重く純金の

上に引用した箇所は、『年代記』第三巻「ベアルンの旅」においてフロワサールがなしたオルテズの宮廷の描写を補完するものとして、ダルメストゥテールおよびザンクらが参照している[8]。なぜなら、昼夜が逆転した生活をオルテズで送るフォワ伯に対して、「ベアルンの旅」で触れられていないようなフロワサールの文学的奉仕の有様が具体的に描かれているからである。また上記の引用にも現れるように、この韻文作品には、フロワサールの過去に向けられた回顧的な視点や、

---

[7] テクストの綴りは写本(MS B: B.N. fr. 830 folios 213a-217a) に基づく。
K. M. Figg & R. B. Palmer, ed. and trans., *Jean Froissart : An Anthology of Narrative and Lyric Poetry*, New York, Routledge, 2001, p. 504.

[8] Michel Zink, *ibid.*, p. 189.
Mary Darmesteter, *Froissart* , Paris, Librairie Hachette et Companie, 1894, p.47.

彼の当時の現状を彷彿とさせるような情報に溢れているだけでなく、「ベアルンの旅」の主題でもあるフォワ伯についても、『年代記』には描かれなかったような、フロワサールが個人対個人としての交流を通して掴んだ姿が表現されている作品として注目されるのである。このようにフロワサールが残したこの物語詩と散文で書かれた『年代記』第三巻の「ベアルンの旅」との間には、作家の個人的回想や実体験の情報が、両作品に跨るように、あるいは韻文・散文の表現形式の差異を越えて、補完的な関係を築くような形で残されている点に留意したい。

2. 神話的エピソードの引用

さて「ベアルンの旅」におけるピエール・ド・ベアルンの夢遊病を取り上げた逸話には、フロワサールが別の韻文作品『青春の麗しき叢』(*Le Joli Buisson de Jonece*)で引用しているアクタイオンの神話的エピソードが、韻文、散文という形式の違いはあるものの、対話相手に請われてそのエピソードを語り手（フロワサール）が話し出すというほぼ似たようなやり方で提示され、物語られる箇所がある。この神話的エピソードが、それぞれの作品においてどのような機能を果たしているのかを次に考えてみたい。まずは、「ベアルンの旅」の構成と内容について大まかに述べた上で、該当する逸話の一部を紹介する。

「ベアルンの旅」は、次のような構成となっている。すなわち、フロワサールがベアルン地方をオルテズのフォワ伯の宮廷を訪れるまでに辿った旅程にあわせて、この旅に同行するフォワ伯の腹心エスパン・ド・リヨンという騎士に、その土地の逸話を語ってもらう旅行記のような様相を呈する部分。次にオルテズの宮廷に到着した後に、フロワサール自身がなす宮廷やフォワ伯のルポルタージュともいえる描写の部分。そしてその後に続く別の匿名の侍臣の口から語られるこの箇所のクライマックスともいえるフォワ伯による子殺しの逸話と、それにつづくフォワ伯にとって庶子の兄弟にあたるピエールの夢遊病の逸話。その後話者がバスコ・ド・モリオンという名の傭兵に替えられて、更にいくつかの逸話が提供された後、最後にフロワサールによってオルテズでのクリスマスの模様が紹介されてこの旅が終わる部分である。ここで取り上げるピエール・ド・ベアルンの夢遊病の逸話は、「匿名の侍臣」という作者にとって都合の良い語り手が、フォワ伯領最大のタブーであったフォワ伯の子殺しという主題を、明らかに脚色を加えた形で物語った後で[9]、引き続き披露するものである。フロワサールはこの侍臣に、ピエール・ド・ベアルンについて、彼が裕福なのか、結婚しているのかどうかと尋ねる。それにこの侍臣が答えることで、以下のような逸話が始まる。

---

[9] 実際はこの伯に対する謀反に加担していたと思われる嫡男ガストンは、「ベアルンの旅」においてはフロワサールによって、実年齢より若く無垢なイメージを付せられ、フォワ伯暗殺のために騙され利用された哀れな被害者として描かれる。一方父親のフォワ伯は、捕らえられた息子に対して激しい怒りを爆発させるものの、結局禁固の刑に処すことにし、息子は死罪を免れる。しかし牢で息子が食事を取ることを拒否したため、その事に怒った父フォワ伯が、たまたま手にしていた爪の手入れ用の小刀の先でほんの少し子供の喉を突付いただけで、絶食で弱っていた子供は運悪く死んでしまう。こうしてフォワ伯の子殺しは不慮の事故という形で描かれる。

ピエール・ド・ベアルンは、周囲の者が注意していないと、夜眠りながら起き上がり武装をして、剣を抜いて戦うという振る舞いに及ぶが、そのことについて本人は説明することができない。彼は確かに結婚しているが、妻と子は親戚であるカスティーリャの王夫妻（フアン一世とベアトリス・デュ・ポルテュガル）の元に身を寄せている。彼の妻はその父、ビスケ伯をドン・ペドロ王に殺され、その領地を押さえられてしまったビスケ女伯である。その後彼女はフォワ伯に庇護を求め、フォワ伯は彼女の領地を取り戻し、その当時うら若き騎士であったピエールと結婚させたのだが、彼女は自分の相続財産であった領地の大半の権利をまだ保有している。彼女の夫の奇行は、ある日出かけた狩りで途方もなく大きな一頭の熊を仕留めた日の晩に始まるのであるが、まずはこの逸話の前半部で、その経緯が明らかにされる箇所を見てみたい。

- Sainte Marie! di je lors à l'escuier, et dont peut ores venir à messire Pierre de Berne celle fantasie que je vous ay oÿ recorder, que il n'ose dormir seul en une chambre, et quant il est endormis il se relieve tout par li et fait telles escarmouches? Ce sont bien choses à esmerveillier.

「なんと聖母様！」と私はその時この侍臣へ言う。「しかし、あなたが私に話してくださるのを聞いたこの夢想は今やどこから来ているというのでしょうか？彼が部屋で敢えて一人でお休みにならず、お眠りになるとひとりでに起き上がり、そのような小競り合いをなさるような？　それは全く驚くようなことです。」

- Par ma foy, dist l'escuier, on lui a bien demandé, mais il ne scet à dire dont il li vient, et la premiere fois que on s'en apparçut, ce fu la nuit ensuivant d'un jour ouquel il avoit es bois de Bisquaie chacié à chiens un ours merveilleusement grant. Cel ours avoit occis quatre de ses chiens et navrez pluseurs, tant que tous les autres le redoubtoient. Adonc prinst messire Pierre de Berne une espee de Bourdiaux que il portoit, et s'en vint ireusement, pour la cause de ses chiens que il veoit mors, assaillir le dit ours, et là se combati à lui moult longuement, et en fu en grant peril de son corps, et reçut grant paine ainçois qu'il le peust desconfire. Finablement il le mist à mort, et puis retourna à l'ostel en son chastel de Languidendon en Bisquaie, et fist aporter l'ours avecques lui. Tous et toutes se merveilloient de la grandeur de la beste et du hardement du chevalier, comment il avoit osé assaillier et desconfire.

「誓って、」とこの侍臣は言われた。「皆この方に確かに尋ねたのですが、しかしこの方はご自分がいかにしてそのような状態に至るのかおっしゃろうにもご存知ないのです。一番最初に人がこのことに気づいたのは、この方がビスケの森で、驚くほど大きな一頭の熊を犬たちを使って狩り立てなさった日の夜のことでした。この熊はこの方の犬の内四頭を殺し、他の全ての犬たちがこの熊を恐れるほどまで幾頭も傷つけました。それゆえピエール・ド・ベアルン殿は携えておられたボルドー産の一本の剣を手になさると、ご自分の犬たちが殺されたのをご覧になられたものですから、激しい怒りにまかせて、この熊に挑もうと向かっていかれました。そしてそこでたいそう長い間この

熊と戦われたのです。この熊をこの方が倒すことがおできになる前に、ご自分の身体を大きな危険にさらして、そして大変な痛手を負って。ついにこの方はこの熊を仕留め、そしてそれからビスケのランギダンドンの城塞のお館へ戻られました。そしてこの熊を彼とともに運ばせたのです。男も女も皆この獣の大きさとこの騎士の勇敢さに驚きました、いかにしてこの方が敢えて挑まれそして倒したのかと。

«Quant sa femme la contesse de Bisquaie le vit, elle se pasma et monstra que elle eust trop grant douleur, si fu prinse de ses gens et portee en sa chambre, et fu ce jour et la nuit ensuivant et tout le lendemain durement desconfortee, et ne vouloit dire que elle avoit. Au tiers jour elle dist à son mari :

この方の妻であるビスケ女伯がこれをご覧になると、この方は気を失ってしまわれました。そしてたいそう激しい苦悩をお示しになりましたので、この方の供の者たちによって抱えられご自分のお部屋へ運ばれてゆかれました。そしてこの日とその晩そして翌日の丸一日すっかり参ってしまわれ、自分がどうしたのかお話しになることを望まれませんでした。三日目に彼女はこの方の夫に言われました。

«“Monseigneur, je n’aray jamais santé jusques à ce que j’aye esté en pelerinage à Saint Jaques. Donnez moy congié d’y aler, et que je y porte Pierre mon filz et Andriene ma fille, je le vous requier.”

「我が殿よ、私は決して良くはならないでしょう、サン・ジャックへ巡礼をいたすまでは。そこへ行くことを私にお許しくださいませ。そしてそこへ私の息子ピエールと私の娘アンドリエンヌを連れて行くことを、あなたにお願いいたします。」

«Messire Pierre lui accorda trop legierement. La dame se parti en bon arroy et emporta et fist porter devant li tout son tresor, or, argent et joyaulx, car bien savoit que plus ne retourneroit, mais on ne s’en prenoit point garde. Toutefois fist la dame son voyage et pelerinaige, et prinst achoison d’aler veoir le roy de Castille son cousin, et la royne, et vint devers eulx. On lui fist bonne chiere. Encores est elle là, et ne veult point retourner ne renvoier ses enfans. Et vous di que en la propre nuit dont le jour messire Pierre avoit chacié et tué l’ours et occis, endementres que il se dormoit en son lit ceste fantasie [lui advint]. Et veult on dire que la dame le savoit bien, si tost comme elle vit l’ours, et que son pere l’avoit chacié une fois, et en chaçant une voix li dist, et si ne vit riens :

「ピエール殿はいとも簡単に彼女に同意なさいました。奥方様は立派な行列を伴って出発なさいましたが、ご自分に先んじて所有するあらゆる財宝、金貨、銀貨や宝石を持ち去り運ばせました。というのもご自分がもう戻られないことを彼女はよくご存知でしたから。しかし誰もそのことに全く気が付きませんでした。いずれにせよ、奥方様は旅をなさり巡礼をなさいました。そしてこの機

会を捉えてご自分のご親族であられるカスティーリャの王と王妃［フアン一世とその妻ベアトリス・デュ・ポルテュガル］に会いにゆかれることにし、彼らのもとへお出でになりました。皆この方をたいそう歓迎なさり、この方はいまだにそこにおられます。そして決して戻られるおつもりはなく、お子様方をお戻しになるおつもりもないのです。そうしてあなたに申し上げますが、ピエール殿が狩をなさり、あの熊を仕留め、殺した日のまさにその夜に、ご自分の寝台でお休みの間にあの夢想がこの方に訪れたのです。そして皆が奥方様は、この熊を見るやいなやそのことについてよくお分かりになったのだと噂したがるのです。この方のお父上が一度この熊を狩ったことがおありでした。その最中にひとつの声がこの方に言ったのです、この方は誰もお見かけにならなかったのに。

«“Tu me chaces, et si ne te vueil nul dommaige, mais tu mourras de male mort.”
「お前は私を追い立てているね、それならば私がお前になんの被害を与えなくとも、お前は不幸な死を遂げるだろう。」

«Dont la dame ot remembrance de ce quant elle vit l’ours, par ce qu’elle avoit oÿ dire à son pere, et li souvint voirement comment le roy Dampietre l’avoit fait decoler et sans cause, et pour ce se pasma elle, ne jamais pour celle cause n’amera son mari, et tient et maintient que encores lui mescherra du corps avant qu’il muire, et que ce n’est riens de ce qu’il fait envers ce qu’il li avendra.[10]

その時奥方様はこの熊をご覧になってそのことを思い出されたのでした。なぜなら彼女はお父上が語るのをお聞きになっておられたのですから。そしていかにしてドン・ペドロ王が理由もなくお父上を斬首させなさったかを確かに思い出されました。そしてそれゆえ彼女は失神なさったのですし、このことのためにご自分の夫を決して今後愛されることがないでしょう。この方はみなし、主張なさっておられるのです、彼が亡くなる前に彼の身にさらに不幸が降りかかると。そして彼に起こるであろうことに比べれば、今彼がなしていることなどなんでもないことだと。

ミシェル・ザンクは、フロワサールがピエール・ド・ベアルンに付した夢遊病という状態と、この逸話の前半部にすでに挿入された神話的要素である「熊」が暗喩する豊かなイメージについて示唆に富む論文を発表している[11]。しかし今回は、個々の単語の背後に広がるイメージではなく、むしろこのテクストの表層にある事柄を追って論じていきたいと思う。

フロワサールがこの逸話を始めるために投げかけた問いは、ピエール・ド・ベアルンに関してであった。まず彼が裕福であるのか、そして結婚しているのかどうか。そして次にこのピエールが就寝中に引き起こす奇妙な騒動について、匿名の侍臣から話を聞きだす。しかしこの話が進むにつれ、話の核は、夫ピエールから妻ビスケ女伯へと移っていくように思われる。

---

[10] Jean Froissart, *Chroniques Livres III et IV*, Lettres Gothiques, Paris, Librairie Générale Française, 2004., ch. 14, pp. 192-193.

[11] Michel Zink, “Froissart et la nuit du chasseur”, dans *Poétique*, 41(1980), pp. 60-77.

夫の夢遊病のきっかけとなる仕留められた熊の死体を見たとき、女伯は気を失い、激しい苦悶を見せるが、それは夫の夢遊病の症状が始まる前のことである。その晩ピエールが大騒ぎをやらかす前に、すでに女伯はこれから夫に起こる災いを確信しているかのように描かれている。匿名の侍臣は女伯にとって、夫の夢遊病の発作などとるに足らず、実はこれから夫に起こるはずのことこそ恐れるべきことなのだと語る。夫がこの熊を殺したが故に、女伯は「もう彼を愛することができない」と。そしてこの熊に関連付けて、女伯の父親が実は以前に同じように大きな熊を狩り、その熊が不吉な予言の言葉を吐いて殺されたが、その予言通り彼女の父は不幸な死を遂げたと語る。そして女伯が示した激しい苦悶を通して、彼女の夫が仕留めた熊と、以前に父親が仕留めた熊との二頭の熊が、災いの象徴としてぴったりと重なり合うように前半部で描かれるのである。この「熊」が不吉な象徴として女伯に激しい精神的ダメージを与える一方、夫ピエールはその晩から睡眠中の奇行が始まるものの、事の重大さを自覚し妻同様に怯え、震え慄いているような様子はこのテクストからは伝わってこない。フロワサールは夢遊病の発作が起こったピエールが夜一人で休まず、寝室には供の者が控えていることを匂わせるが、この件で彼が大騒ぎをやらかすのは、眠りながら起き上がった際に武器が見つからないか取り上げられそうになった時だけである。奇妙なことに女伯はその熊がどのように不吉で重大な意味を持つものなのか、夫に警告を与えることをせず、この件に関して沈黙を守り、理由を偽って全財産と子供を連れ夫のもとを逃げ出してしまう。この経過から、この熊がピエールにとってというより、女伯にとってこそ最大の禁忌であるという点は明らかと思われる。

ところで、このピエール・ド・ベアルンの夢遊病の症状とは、どの程度信憑性を持って受け止められるべきものなのだろうか。ここで先ほどの『フロラン物語』の引用に注意をもどしたい。この箇所で、フロワサールはフォワ伯のオルテズの宮廷に滞在中、毎晩自作の物語詩『メリアドール』を伯のために読み上げた様子を描写している。この作品に登場する、いわば主役のメリアドールの恋敵となるカメル・ド・カムェ（Camels de Camois）という名の騎士は、ピエールと同様に夜ごと夢遊病の症状がおこるため一人で休むことを恐れるという状態で描かれる。とすれば、自分の兄弟が夢遊病で悩まされているはずのフォワ伯の夜会で、そしてもちろんそこにはピエール自身も側近として侍っているはずなのであるが、その中でフロワサールがこのような物語を読み上げたという可能性は、極めて低いのではないかと考えられている。むしろ、フロワサールがピエール・ド・ベアルンの話を聞き、それに触発されて『メリアドール』の改訂をおこなったか、あるいは『メリアドール』で用いた手法を使ってピエール・ド・ベアルンの夢遊病のエピソードを後から創作したか、このどちらかの可能性が極めて高いとされているのである[12]。いずれにせよ、『年代記』には、ピエールにおこった夢遊病の発作が、その後彼の運命に重大な影響を与えたというような解釈や情報は記されていない。

この女伯の逃亡について、禁忌を象徴する「熊」と、夢遊病の夫ピエール自身を重ね合わせ、

---

[12] Michel Zink, “Froissart et la nuit du chasseur”, p.62.

その両者への恐れのために逃げ出したのではなかったかと考える見方もあるが[13]、このテクスト上では、この「熊」が具体的な誰かあるいは具体的ななにかを象徴しているような匂わせ方はされていない。しかしフロワサールがこの「熊」という存在に、この当時口にするのをはばかられるようななんらかの事件を象徴させて描いているのではないかという可能性は十分に考えられる。それは夫ピエール・ド・ベアルンに関することかもしれず、あるいは女伯の庇護者であったフォワ伯にも関係することかもしれないが、この当時オルテズの宮廷に出入りしている人であれば「あのこと」と推測されうるようななにか、そして女伯が沈黙を守り、秘密裏に逃げ出してしまうようななにか非常に剣呑な出来事であったのではないだろうか。女伯が守る「沈黙」は、フロワサールが後半部で述べるアクタイオンの神話、禁忌を犯し、そのことに対して動物への変身によって沈黙を課せられるアクタイオンの神話の持つイメージとも響き合うように思われる。匿名の侍臣に上記のような逸話を語り聞かせてもらったフロワサールは、この不吉な予言の言葉を吐いた熊の話に促されたように、アクタイオンの神話のエピソードを語ることになる。この話の前半部までは、「熊」は女伯にとって語るのもはばかられるような禁忌の象徴として描かれた。ここからフロワサールが語り始めるアクタイオンの神話のエピソードによって、この「熊」」には新たなイメージが付されることになる。

> «Or vous ay je compté de messire Pierre de Berne, dist l'escuier, selonc ce que vous m'en avez demandé, et c'est chose toute veritable, car ainsi en est et ainsi en advint, et que vous en semble? »
>
> 「ピエール・ド・ベアルン殿について私は今あなたに語りました、」とこの侍臣は言われた。「あなたが私にそれについて望まれたのに応じて。そしてこのことはまさに本当のことなのです。というのもこのことについてはこんな風であり、そしてこのように起こったのですから。それであなたにはどのように思われるでしょうか？」
>
> （中略）
>
> «Je le croy bien, et ce puet bien estre. Nous trouvons en l'escripture que anciennement les dieux et les deesses à leur plaisance muoient les hommes en bestes et en oyseaux, et aussi bien faisoient les femmes. Aussi puet estre que cel ours avoit esté un chevalier chaçant es forests de Bisquaie, si courrouça ou dieu ou deesse en son temps, pour quoy il fu muez en fourme d'ours, et faisoit là sa penitance, si comme Atteon fu muez en cerf.
>
> 私はこのことを確かに信じますし、これはまさしくありえることです。私たちは文学作品の中に古くから神々や女神たちが気まぐれに男たちを獣や鳥に変えたり、また女性たちも同様にしたのを見出します。その熊もまたビスケの森で狩をしていた一人の騎士であったのかもしれません。その当時の神か女神がそれほど腹を立てたのかもしれず、その結果熊の姿に変えられ、罪を償ったのかもしれません。アクタイオンが一頭の牡鹿に変えられてしまったように。

---

[13] *ibid*, p.63.

- Acteon? respondi li escuiers, doulz maistres, or m'en comptez le compte, et je vous en pri.

「アクタイオンですって？」とこの侍臣はお答えになった。「ご親切な貴殿よ、今私にそれについての話をどうかひとつ語ってはいただけませんか。」

- Volentiers, di je. Selon les anciennes escriptures nous trouvons escript que Atteon fu un appert, faitiz et jolis chevalier, et amoit le deduit des chiens sur toute riens, dont il advint une fois que il chaçoit es boys de Thessale, et esleva un cerf merveilleusement grant et bel, et le chaça tout le jour et le perdirent toutes ses gens et ses levriers aussi. Il, qui estoit fort ententif et desirant de poursuivir sa proie, suivi la chace et la trace du cerf tant qu'il vint en une pree ou boys enclose et advironnee de haulx arbres, et là en celle pree avoit une tresbelle fontaine. En celle fontaine pour soy rafreschir se bailgnoit Diane la deesse de chasteté, et autour de lui estoient des pucelles. Le chevalier s'embati sur elles, ne onques il ne s'en donna garde. Si ala si avant que il ne pot reculer. Elles qui furent honteuses et estranges de sa venue, couvrirent errant leur dame qui fu vergoigneuse de ce que elle estoit nue, mais par dessus toutes ses pucelles elle apparoit et vit le chevalier. Si dist :

「喜んで、」と私は言う。「古くから書かれたものによると、アクタイオンは勇ましくて美しく雄々しい一人の騎士であって、犬を使った気晴らしがなにより好きだったと書いてあるのです。さてある時テッサリアの森で狩をしていたとき起こったことですが、一頭の驚くほど立派で美しい牡鹿が立ち上がったのです。それで彼は丸一日それを追って、彼の供の者たちも猟犬も見失ってしまいました。まったく夢中になって自分の獲物を追跡し、狩を続けその鹿の跡を追い、気がつくとあるひとつの草原にたどり着いたのです。その草原は森が覆っており、背の高い木々に囲まれていました。そしてまさしくこの草原には一つのたいそう美しい泉があったのです。この泉では、涼むために狩の女神ディアナが水浴びをしており、この方の周りには乙女たちもおりました。この騎士は、彼女たちの方へ、全く注意を払わずに駆け寄ってしまいました。そしてあまりに前に進み出たので、後戻りすることができませんでした。彼女たちは恥ずかしがり、彼の到来に慌てふためき、裸身であったことを恥ずかしく思われた彼女らの女神をすぐに隠しましたが、しかし供のあらゆる乙女たちの上から彼女はその姿を見せていたので、この騎士は女神を見てしまったのです。女神は言いました。

«"Atteon, qui ci t'envoya, il ne t'ama gueres. Je ne vueil pas, quant tu seras ailleurs que ci, que tu te vantes que tu m'aies veu nue, ne mes pucelles. Et pour l'outraige que tu as fait il t'en fault avoir penitence. Je vuiel que tu soies tel et en la fourme que le cerf que tu as huy chacié est."

「アクタイオンよ、お前をここに送った者は、お前をちっとも大事にしなかったのだね。わたし

は気に入らないのだ、お前がここからよそへ行き、私と私の乙女たちが裸でいるのを見たと鼻にかけるのを。お前がなしたこの過失のために、お前は償いをせねばならない。私はお前に、今日お前が狩っていたその牡鹿の姿となって、償うことを望むのだ。」

«Tantost Atteon fu muez en cerf, [qui] de sa nature aime les chiens. Ainsi puet il avenir de l'ours dont vous m'avez fait vostre compte, et que la dame y scet autre chose, ou savoit, que elle ne disist pour l'eure ; si la doit on tenir pour excusee.»

生来犬好きなアクタイオンはすぐさま牡鹿に変えられました。あなたが私に話してくださったその熊にも、そのようなことがおこりえるのです。奥方様も別のことをご存知であられるかもしれませんし、あるいはご存知であったのですね、この方が今のところおっしゃられていないような。それならば、この方のことは容赦してさしあげるべきですね。」

L'escuier respondi :
«Il puet estre.»
Ainsi finasmes nous nostre compte.[14]
この侍臣はお答えになりました。
「そうかもしれません。」
こうして私たちは我々の話を終えたのであった。

逸話の前半部で禁忌の象徴として提示されていた「熊」は、後半部分でフロワサールによって、女神ディアナによって牡鹿に姿を変えられたアクタイオンという神話の中の登場人物に繋ぎ合わされる。オウィディウスによる『変身物語』では、牡鹿への変身によって、語るべき言葉をとりあげられ沈黙を課せられたアクタイオンが、それだけでは許されずに、結局自分の飼っていた犬たちに食い殺されることになる。だがフロワサールは、この逸話の中でそこまで語ることがない。アクタイオンの運命は、先ほどの前半部で匿名の侍臣が語る逸話の「熊」と重ね合わされることですでに暗示されているからである。女伯にとっての禁忌の象徴である「熊」は、アクタイオンと結びつけられることで、自らが禁忌を犯したことで罰せられる存在であるという意味をも帯びる。しかしこの逸話で描かれる「熊」は、動物に変身させられたことで沈黙を課せられたアクタイオンに対応して、言葉を取り上げられた存在であるべきはずであるのに、自分を狩る人間に対して不吉な予言の言葉を発するという行為によって自らが禁忌の象徴であるという特別な役回りを明らかにする。こうした矛盾が生じるにも関わらず、ここでこの神話が挿入されているのは、フロワサールがこの逸話の中で、現代の読み手である私たちには解読することが難しい、はっきりとは語ることのできないあるタブーを、この呪われた「熊」という禁忌の象徴的な存在へと託して描いた後で、この話を締めくくるためであったのではないか。

その答えを示唆するものとして、フロワサールの韻文作品、『青春の麗しき叢』で、このアクタ

[14] Jean Froissart, *Chroniques Livres III et IV*, ch. 14, pp. 193-195.

イオンの神話のエピソードがどのように使われているかを見てみたい。この寓話詩の中で、語り手であるフロワサールは、かっての自分とは違い、もう自分は若くはないと感じている。そしてここで彼の対話者として登場する「若さ」(joneche）に対して、宮廷風の恋愛をテーマとした詩作に耽ることに感じているためらいを寓話に例えて表現するために、このアクタイオンの神話を引用するのである。ここでは、フロワサールは、女神ディアナの怒りに触れて、牡鹿の姿に変身させられたアクタイオンが、自分の連れていた猟犬たちに食い殺されるという悲惨な最後を遂げる場面を次のように語る。

La fu mues en otel fourme	その時彼は異なる形へと変えられた
Com li cers dont je vous enfourme	私があなたに語る牡鹿のように
Li levrier qui de priés le sieuwent	彼にぴったり付き従う猟犬たちは
Au cours moult tost le raconseiuwent,	［追跡の］途中ですぐに彼にたどり着く
Ne scevent qui ch'est ne qui non,	猟犬たちには分からない、彼がなんであり、なんでないのか
Ne nommer ne scevent son nom,	猟犬たちは彼の名前を呼ぶことも知らないし
Ne plus ne le tiennent a mestre.	もはや彼を主人とはみなさない
La le faut en grant dangier estre	その時彼はまさしく危機的状況にある
Et escheir et demorer.	そして彼は［危機的状況に］落ち込み、とどまったままだ
Riens n'i laissent a devorer.	そして猟犬たちは何も残さずむさぼり食らう
Emsi vint Acteons a fin.	こうしてアクタイオンは最期を迎えた

以上のようなアクタイオンの最後を語り終わると、フロワサールは次のようにしめくくる。

Compains je le vous di a fin:	友よ、私はあなたに最後に次のことを言おう
Se maintenant je me hastoie	もしたった今私が急いでいるとして
Et sus ches dames m'embatoie,	そのようなご婦人方の中に入り込んでしまったら
Que sçai je, se Venus y est	私に何が分かるというのか、もしウェヌスがそこにおられて
Qui me regarde, se se test,	私を目にして、そして黙っておられたら
Dont je poroie estre escarnis.[15]	私が嘲られるだろうその時に

この引用で注意をしたいのは、このエピソードが、明らかに語り手であるフロワサールに対して語りの抑制の効果として働いていることである。この詩のテーマは、青春を失った中年男としてのフロワサールが、詩作に必要な「愛」への興味をもはや失いながらも、やがてその「愛」が神への愛へと昇華されていくというものである。それゆえにここでは、牡鹿に変身させられたアクタイオンのその後の運命に対してはあまり重点が置かれていないといえる。フロワサールは、神話のクライマックスより以前の、アクタイオンが女神と乙女たちの前に走り出てしまった場面

[15] *id.*, *Le Joli Buisson de Jonece*, Genève, Librairie Droz, 1975, pp. 125-126.

に自らを重ね合わせ、女性たちにあざ笑われるというイメージを引用の締めくくりとして提示した。彼はすなわちここで、このエピソードそのものを、愛というテーマを「物語ること」を自らに抑制するという意味合いを与えるために使用したと思われる。

この点を踏まえて、「ベアルンの旅」の逸話へ戻るとき、このアクタイオンのエピソードの引用が新たな意味を付すことになるのではないか。フロワサールがこの逸話の後半部分で、言葉を発する「熊」と沈黙を課せられたアクタイオンという両者の間にある矛盾を抱えながらも両者を結びつけ、この神話的エピソードを導入した目的は、実は沈黙を課せられた主人公を持つこの神話そのものが与える「物語ることへの抑制」というイメージの効果を狙ってのことではないだろうか。フロワサールがフォワ伯の子殺しに引き続き、領内で起きた語り草となるようなある事件を書き留めておきたかったのだとしても、彼はこの事件を具体的に語るができず、またそれを暗示することによってこの件に関する更なる憶測や噂を煽ることを決して望んではいなかった。このことは本人がこの逸話に続いて残している短いコメントからも分かる。すなわち、この神話的エピソードの導入は、フロワサールが抱える、それ以上その主題を具体的に物語ることへのためらいを暗示させつつ、この逸話を耳にすることになる人々の憶測や噂に対しても幕を下ろしてしまうという二重の効果を狙ったものだということになる。

∴

ここでもう一度第六章から始まった「ベアルンの旅」が十四章までどのように流れてきたのか構成を簡単に整理してみたい。フロワサールはフォワ伯のオルテズの宮廷にやってくるまでの旅の同行者であった伯の腹心の騎士エスパン・ド・リオンという信頼のおける登場人物に、旅程に沿った逸話を語らせながら、随所にフォワ伯の人物描写を取り入れた。フロワサールが旅を進めれば進めるほど、この伯の政治的配慮がからんだ気前のよさや秘められた暴力性も引き出されていくような構成になっていた。そして第十三章では、それまでとは語り手が変わり、フロワサールがオルテズの宮廷で出会った匿名の侍臣が、フォワ伯領内では最大の禁忌であったであろう伯の子殺しの逸話を脚色を加えて語る。その直後にこの第十四章のピエール・ド・ベアルンの夢遊病の逸話が配されている訳である。前章のフォワ伯の子殺しの逸話を語ったのと同じ語り手が、引き続いてこの逸話の語り手も務めていることから、第十三章と十四章の繋がりは、とても緊密なものとして現れる。この同じ語り手を通して描かれるフォワ伯の子殺しとその庶子の弟ピエールを捨てて逃げ出した女伯の二つの事件は、大っぴらに話題には出来ないこの一族のタブーでありながら、領内では恐らくその当時噂が噂を呼ぶほど魅力的な話題であったに違いない。フロワサールは敢えてその二つの事件を脚色を加えながらここに並べて提示をした。そしてこれらの件がどのようにとらえられるべきであるのか、それぞれの逸話の後に簡潔だがはっきりとしたコメントを残している。すなわちフォワ伯の子殺しについては、亡くなった嫡男とフォワ伯の両者へ心からの同情の念を、そして女伯に対しては語ることのできない事情を抱えた彼女への理解を示すのである。そしてこの二つの話題を締めくくるように、そしてこれらの事件に対する沈黙を促し、噂に終止符をうつようにアクタイオンの神話を挿入したのである。

匿名の侍臣が語って聞かせた「途方もなく驚くべき話」は、そのように起こったと信じるべきものとして提示されるが、この逸話の主題は、フロワサールがこの話の口火を切るために、対話者に投げかけたピエール・ド・ベアルンとその夢遊病の発作についてではない。「ベアルンの旅」が執筆された当時の人々であれば、フロワサールがここで幕を引こうとした領内の事情を嗅ぎ取れたのかもしれない、フロワサールが語りたくても語ることのできない主題、禁忌とされる真の主題は、言葉を発する「熊」という象徴的な存在に託される。この「熊」を手にかけた者、つまりはこの「熊」に関わった者には、この呪われた「熊」、あるいは悲惨な死を遂げたアクタイオン同様にとんでもない災いがふりかかるのではないかと暗示させるように、フロワサールはこのアクタイオンの神話を引用として用いたのではないだろうか。語ることを抑制され、欠落してしまったこの逸話の核を、フロワサールは引用した神話のエピソードで埋めているのである。

このように韻文で使用された文学的手法が違和感なくフロワサールの散文体で記された歴史的著述の中に溶け込んでいるのは、フロワサールの記した歴史そのものが、極めて個人的視点から描かれているからに他ならない。フロワサールはここであえて二つの禁忌の物語を、個人的な視点から再構築しているのだ。そしてそれらの物語を「アクタイオンの物語」という万人に共通の神話の世界と結び付けることによって、それ以上の追求を避け、そのようなものとして読み手に受け入れられることをせまったのである。禁忌を犯し沈黙の罰を科せられた上、非業の死を遂げる主人公を持つこの神話の引用とともにこれらの逸話は終わり、禁忌の物語に対するこれ以上の語り、あるいは詮索を拒否するように、幕は閉じられるのである。